

報告タイトル（\*日本語と英語両方ご記入ください）

歴史の中の「中国学派」

—「中国的」国際関係論の誕生と変容—

The “Chinese School” in Historical Perspective:

The Emergence and Evolution of a “Chinese” Theory of International Relations

氏名（所属）

李 玥（神戸大学）

LI Yue (Kobe University)

要旨（800字程度）

本論文は、1980～90年代に遡り、国際関係論としての「中国学派」の誕生史について、同時代における中国の官界・学界双方の動向に着目しつつ、各種の公刊・未公刊資料を用いて、その連続性と断絶性を検討し、それによって中国独自の学知の思想的脈を明らかにすることを目的とする。

従来、中国における独自の国際関係理論の形成が欧米主導の理論体系との関係においていかなる意味を持つのかについては、国際的にも多様な議論が存在するものの、批判的な見方が主流を占めてきた。なかでも、「中国学派」は、中国の大国化に伴う副産物、あるいはその正当性を裏付けるための政治的言説として理解される傾向が強い。

これに対して本論文は、国際社会における中国の台頭といったパワー・ポリティクスの視点のみでは捉えきれない、長期的な歴史的・文化的文脈の中で生じた中国知識人の欲求と葛藤に着目し、中国政府の政治的意図を相対化する視座から、「中国学派」の誕生史を再構成した。具体的には、「中国の特色ある国際関係論を構築せよ」という中国当局の呼びかけに対して、中国の学界では、それとは異なる解釈の次元において中国独自の国際関係論が積極的に模索されていた構図が明らかとなった。本論文は、このような流動性を伴うメカニズムを、「官学分離構造」と概念化し、その動態を分析するための枠組みとして提示した。

本論文の核心的主張は、以下の3点に要約される。第一に、「中国学派」とは、中国の大国化に伴う副産物ではなく、1980年代前半の改革開放初期において欧米理論を受容する過程のなかで胎動したものである。第二に、中国独自の国際関係学知の形成は、中国政治が国策を主導し、学界がそれに追随するという通説的図式よりも、むしろ形式的な一致と実質的な乖離が併存する構図の中で理解されるべきである。第三に、天安門事件やソ連崩壊といった構造的な政治変動が中国の学知形成に与えた衝撃は限定的であり、1980～90年代を通じて「官学分離構造」に一定の変容が見られたとはいえ、その基底にはなお連続性が存在していた。こうした構造的視点および一次資料の分析を中心に据え、「学問を学問する」という本論文の試みは、国際関係論としての「中国学派」の理解にとどまらず、歴史的かつ内在的視点から対象国・地域の独自性および主体性を探求するという地域研究の根幹的理念を再考するうえでも、有意義な示唆を与えるものだと考えられる。